【資料】 大学入試研究ジャーナル第 34 号，175-181，2024

高大接続事業「医学部体験授業」の効果の持続の可能性

山田 恭子，高山 千利，清水 千草，田中 寛二（琉球大学）

本稿では，「医学部体験授業」の効果の持続性について検証した。この体験授業では医学部の授業や実習の体験，医療研究に関するレクチャー等が実施される。参加した高校生や医学科生のアンケートからは，動機づけの維持・向上と医師・医学部へのイメージや意識に肯定的な変化が見られ，その効果は持続している可能性があることがわかった。将来像やキャリアプランについてはこれら 2 つほどではないが，一部の参加者では変化があり，持続している可能性が示された。医学部体験授業における医学部や医師の「実際のところ」を体感することにより一時的な効果だけでなく，その効果は持続し，特に人生目的意識の向上やバーンアウトの防止につながる可能性が高いと考えられる。

キーワード：高大接続，高大連携，キャリア形成

1 医学部体験授業

1.1 医学部体験授業とは

中央教育審議会（2014）による答申を受け，各大学では様々な高大接続事業が行われている。本稿では，琉球大学で平成 30 年度から実施している高大接続事業「琉大にぬふぁ星講座」のうち医学部を目指す高校生に向けた「医学部体験授業」の効果の持続性を検証する。

本稿で紹介する医学部体験授業は，沖縄県内の高校生に，医学部の授業・実習，最先端の医療や研究の体験を通して，医師・医学系研究者を志す強い意志を育むことを目的として実施している。内容としては，医学部の実際の実習の体験，講義や最先端の研究，キャリアについてのレクチャー，医療倫理についてのディスカッション，医学部生との交流等が含まれ，2 日から 5 日間に渡って体験する（山田ほか，2023）。

1.2 医学部体験授業の意義

1.2.1 動機づけ

全国的に医学部医学科の人気は依然として高く，入学のためには高い学力が求められる。そのため受験生は受験まで高い動機づけを保ち，努力を続けなくてはならない。動機づけを高く保つためには目標を適切に設定することが効果的であると言われている。Locke（1968）によると，効果的な目標を設定する際の主な原則に，目標は明確で，適度に困難度が高い必要があるとされている。医学部体験授業では実際の実習や講義の体験，キャリアについてのレクチャー，医学部生との交流をするため，目標が明確になると考えられる。実際にこれまでに開催した医学部体験授業の効果をまとめた山田ほか（2023）では，医学部体験授業に参加したことで動機づけが高まったことが示された。

1.2.2 医師や医学部へのイメージや意識

上述したように，医学科に入学すること自体が困難であることから，医学部に入学すること自体が目的となり，学生が入学後にバーンアウトのような状態に陥る可能性も高い。大学生のバーンアウトについて調べた藤野ほか（1999）は，人生目的意識の高さがバーンアウトと関連していることを示し，人生目的意識が高いとバーンアウトの低減や回避につながると推察している。医学部の実際を知った上で入学することができれば，入学自体が目的となることを防ぎ，その先を見据えた状態で入学できるので，人生目的意識の向上につながり，バーンアウトを防止することの第一歩となる可能性がある。山田ほか（2023）では，医学部体験授業に参加することで，医師や医学部に対するイメージや意識の広がりが起こり，実際に即したものとなったことが示唆された。具体的には医療のみではなく研究を行うこと，病院以外での活躍等である。

1.2.3 キャリア教育・キャリアプラン

現在，医学部入学後のキャリア教育が広がりを見せている（全国医学部長病院長会議，2013）。それは初期臨床研修において研修先を選択する必要や，ライフプランを考慮したキャリアプランの形成が必要となっているためである。一方，医学部を目指している高校生に目を向けると，医学部を進学先に選択しているため，すでに職業選択が完了しているとみなされがちである。しかしながらその実態は，医学部の教員から「想像以上に医学部のことを知らないまま入学していると言わざるを得ない」という声が聞かれることからもわ

かるように，高校生が医学部や医師となった後の実態を知った上で職業選択やキャリアプランの形成を行っているとは言い難い。医学部体験授業を通して，医学部の実態を知ったり，教員のキャリアを聞いたりすることでより適切なキャリアプランの形成を促すことができると考えた。なお，ここでいうキャリアプランとは，仕事を軸とした人生（キャリア）において「会社や組織の中で担いたい役割や業務」「仕事を通じて実現したいこと」など，自分自身の将来を具体的に言葉で表したもの（日本の人事部, 2018）と定義している。山田ほか（2023）によると，医学部体験授業に参加することによって，キャリアプランや将来像についての明確な意識の変化が起こったことは示せなかった。しかしながら，自由記述部分で職業としての医師についての視野が広がったことが示唆された記述が散見されたことから，キャリアプランについて考えるきっかけとなった可能性はあると考えられる。

1.3 目的

以上のことから，医学部体験授業は，動機づけの向上や医師や医学部へのイメージや意識の変化に寄与しており，キャリアプランや将来像については明確な変化は示せなかったが，そのきっかけを与えることはできていたと言える。そのことは, 人生目的意識の向上, それに伴うバーンアウトの防止，キャリアプランの形成につながる第一歩となるだろう。しかしながら，その効果は一時的なものに過ぎないかもしれない。効果が持続することが示せれば，医学部体験授業はこれら 3 点のために大きく寄与すると言えるだろう。

そこで，本稿では効果の持続性について検証する。検証する主な効果は，上述した動機づけ，医師や医学部へのイメージや意識，将来像やキャリアプランとした。これらについて医学部体験授業に参加した高校生や，すでに琉球大学医学部医学科に入学している学生にアンケートを行うことによって追跡調査した。医学部体験授業に参加後, 参加者は様々な経験をするため, 医学部体験授業の効果の持続のみが要因とは言い切れないかもしれないが，少なくとも寄与したことは示せると考えて追跡調査を行うこととした。

2 アンケート調査

2.1 対象者

これまでの医学部体験授業の参加者は，のべ 82 名である。アンケート実施時点でのアンケート対象者は高校生 33 名，琉球大学医学部医学科に在籍する大学生（以下，医学科生とする）19 名であった。これらの対象者以外は，すでに高校を卒業しており，本学以外の大学や本学医学科以外に進学したため，追跡しなかった。アンケートに回答したのは 14 名で，内訳は高校生が 5 名（高校 1 年生 2 名，高校 2 年生 2 名，高校 3 年生 1 名，回答率 15%），医学科生が 9 名（1 年生 1 名，2 年生 6 名，3 年生以上 2 名，回答率 47%）であった。高校生からの回答率が低いのは，後述するように教員を通しての依頼だったことが理由として考えられる。個人情報保護の観点からこのような方法を採用した。なお, 医学部体験授業参加後の経過期間は, 短い者で約 7 カ月，長い者で約 4 年半であった。

2.2 調査期間

調査は 2023 年 2 月から 3 月に実施した。

2.3 調査方法

調査は全て Microsoft Forms を用いて WEB にて実施した。高校生には本体験授業の窓口となった教員を通じて，医学科生には学内メールアドレスを用いて URL を送り回答を求めた。

アンケートの冒頭には，医学部体験授業の改善と，全国の高大接続事業の発展のためというアンケートの目的を示し，了承した者が回答した。

2.4 調査内容

調査内容は主に，医学部体験授業直後の状況を思い出して回答する項目のセクション（以下，終了直後とする），現在もしくは受験の時期について回答する項目のセクション（以下，現在または受験期とする），その他の項目のセクション（以下，その他とする）の 3 つのセクションから成り立っていた。その他を除くそれぞれのセクションは主に 1）やる気（動機づけ）2)医師や医学部へのイメージや意識　3)将来像やキャリアプランから成り立っていた。2 つのセクションでほぼ同じ内容を問うことで医学部体験授業直後から受験の時期，現在までの持続性や変化を見ることができると考えた。なお，現在または受験期のセクションは高校生向けの項目と医学科生向けの項目が設定され，内容が一部異なっていた。状態を問う選択式の項目に加えて，「その後に起こした行動」「どのように変化したか」等を自由記述で問うた。

その他のセクションでは，高校生には現在進もうと考えている進路，医学科生には受験期や医学科入学後に役立ったことを尋ねた。最後に全員に対してこの授業を他の人に勧めたいかを尋ねた。主な項目は表 1 に示した。

3 結果

3.1 結果のまとめ方

結果は，動機づけ，医師や医学部へのイメージや意識，将来像やキャリアプラン，その他の項目群ごとに，終了直後と現在または受験期を，回答人数と自由記述の内容を比較しながらまとめる。

3.2 動機づけ

動機づけについては，高校生・医学科生にわかりやすいよう，やる気という言葉に置き換えて質問した。人数の推移は表2にまとめた。

3.2.1 動機づけの直後の状態

動機づけは，14名中11名が「高まった」，2名が「やや高まった」，1名が「あまり変化はなかった」と回答した。あまり変化がなかった理由（医学科生）は，「元々非常に高かったため」という回答であった。

「高まった」「やや高まった」と回答した者が具体的に起こした行動は，以下の3つのカテゴリに分けることができた。1つ目は，勉強に関するものであった。勉強時間が増えたり，積極的に教員に質問した等である。2つ目は勉強の目的やビジョンに関するものであった。医学部に入学した後のことを想像し，やる気を保った，入学後に何をしたいかを考えた，入学のためではなく，医学部で勉強するための受験勉強だと意識できた等である。3つ目は医療課題への関心の高まりであった。一層関心を持って，地域の医療課題について調べるようになったという声が聞かれた。それぞれのカテゴリ間で高校生と医学科生の回答人数に大きな偏りはなかった。

3.2.2 動機づけの現在または受験期の状態

現在の動機づけの状態について，高校生は「終了直後より高まっている」という回答が4名，「終了直後の状態が維持されている」という回答が1名であった。

医学科生には，受験期の状況について尋ねた。動機づけが「終了直後より高い状態で受験を迎えた」が3名，「終了直後のやる気の程度が維持された状態で受験を迎えた」が2名，「一時は下がった時期もあったが，受験時にはある程度高い状態になっていた」が3名，「終了直後よりは下がったがある程度の高さは維持したまま受験を迎えた」が1名であった。なお，医学科生の回答者は1名を除き2年生の時に医学部体験授業に参加していた。そのため，ほとんどの者の受験までの期間は約1年半であった。参加から受験までの期間が最も長い者の回答は「終了直後のやる気の程度が維持された状態で受験を迎えた」であった。

まとめると，医学部体験授業に参加することで動機

表1 主な質問項目

終了直後のセクション
・医学部への志望の程度 【やる気】・終了後にどのように変化したか ・やる気の変化に伴う具体的な行動の変化 【医師や医学部へのイメージや意識】・どのように変化したか，理由 【将来像やキャリアプラン】・変化の有無とどのように変化したか，理由
現在または受験期のセクションー高校生向けー
【やる気】・今のやる気の状態 【医師や医学部へのイメージや意識】・終了直後と比較して，変化したか ・変化があった場合，そのきっかけや出来事 【将来像やキャリアプラン】・終了直後と比較して，変化したかどうか
現在または受験期のセクションー医学科生向けー
【やる気】・医学部体験授業後から受験までのやる気の変化と具体的な行動 【医師や医学部へのイメージや意識】・終了直後と比較して，変化したかどうか 【将来像やキャリアプラン】・終了直後と比較して変化したかどうか
その他のセクション
【高校生向け】・今でも医学科，琉球大学の医学科を志望しているか 【医学科生向け】・受験までの間に医学部体験授業の内容が役立ったか ・入学後に医学部体験授業の内容が役に立ったか ・医学部体験授業を勧めたいかどうかとその理由

注　変化したか尋ねた後には，どのように変化したかも必要に応じて尋ねた

表 2 動機づけの推移

終了直後	高校生	医学科生	全体
高まった	3	8	11
やや高まった	2	0	2
あまり変化はなかった	0	1	1
やや低くなった	0	0	0
低くなった	0	0	0
現在（高校生のみ）	高校生		
医学部体験授業直後より高まっている	4	-	
医学部体験授業直後の状態が維持されている	1	-	
医学部体験授業直後よりは下がったが，高い状態ではある	0	-	
医学部体験授業直後より下がり，低い状態である	0	-	
医学部以外の進路を選択することにし，そこへ向かって努力している	0	-	
受験期（医学科生のみ）		医学科生	
医学部体験授業直後より高い状態で受験を迎えた	-	3	
医学部体験授業直後のやる気の程度が維持されて受験を迎えた	-	2	
一時は医学部体験授業直後より下がった時期もあったが，受験時にはある程度高い状態になっていた	-	3	
医学部体験授業直後よりは下がったが，ある程度の高さは維持したまま受験を迎えた	-	1	
かなり下がったが，受験は乗り切れた	-	0	

づけは高まり，具体的な行動に表れていることがわかった。そしてその効果は現在もしくは受験まで上昇したり，維持されたりしていた。長期的には一時的に下がった者もいたが，ある程度の高さまで戻っていた。

3.3 医師や医学部へのイメージや意識

3.3.1 医師や医学部へのイメージや意識の終了直後の状態

医師や医学部へのイメージや意識については 14 名中 13 名が「よい方に変化したと思う」，1 名（医学科生）が「変化はなかった」と回答した（表 3）。変化の内容は以下の 4 つのカテゴリに分けることができた。1 つ目は，医師である教員に対する印象の変化であった。かたいイメージがあったが，柔和な先生が多いと感じた，先生の存在がとても近いものと感じた，またそれを通して興味関心が深まったといった声が聞かれた。2 つ目は医学科での生活へのイメージの変化であった。勉強もしながらいろいろな人との交流，実習等ですごく楽しそうだと思えた，忙しいけどサークルやバイトもして楽しんでいると知り，ワクワクするように

表 3 医師や医学部へのイメージや意識の推移

終了直後	高校生	医学科生	全体
よい方に変化したと思う	5	8	13
変化はなかった	0	1	1
よくない方に変化したと思う	0	0	0
現在	高校生	医学科生	全体
変化した	2	2	4
医学部体験授業直後と変わらない	3	7	10

なった等である。このカテゴリの回答は高校生のみであった。3つ目は，進路，キャリアについてであった。臨床医でなくてもよいと気づけたり，得た知識を活かす場があると気づいたり，逆に自分は研究よりも臨床医を目指したいと気づいたりしていた。また，入学後のイメージが具体的になったことで，キャリアについて深く考えるきっかけになったという声も聞かれた。4つ目は医者というもの自体へのイメージであった。人体のことばかりではなく，薬学等もあることを知ったり，医者の役割について自分なりの考えを深めたりした者もいた。このカテゴリの回答も高校生だけであった。

3.3.2 医師や医学部へのイメージや意識の現在の状態

現在の医師や医学部へのイメージや意識について，高校生のうち2名が「終了直後からさらに変化した」，3名が「終了直後と変わらない」と回答した。「さらに変化した」と回答した2名にどのようにさらに変化したのかを問うと，2名とも診察をしたり病気を治したりするだけではない。命や心を守るために努力と成長を，向上心を持って行うものである。医師は人の人生をよりよくする仕事だと感じていた。そのように感じたきっかけは，2名とも体験授業内での胎児の障がいの有無に伴う人工妊娠中絶の是非についてのディベートと回答した。この内容が医学部体験授業で最も印象に残っていると回答した者はこの2名以外にも多かった。また，この2名のうち1名はレクチャーを行った講師が医師となった理由や，医師として働く中で感じたことを聞いたこともきっかけとして挙げていた。

医学科生では，2名が「終了直後からさらに変化した」，7名が「終了直後と変わらない」と回答した。「さらに変化した」と回答した2名にどのようにさらに変化したのかを問うと，2名とも医学部に入ることだけを考えていたが，医学部でどう頑張るか，将来どのようになるかを考えるようになった，授業や研究は意外と地味で，面白いから頑張るではなく，その中から自分の興味のあるものを探すようになった等，医学部での学びについて回答した。さらにこのうち1名は医師との壁がなくなり，とても頼りがいがある人生の大先輩というイメージになったといった医師に関することも挙げていた。

医師や医学部へのイメージや意識についてまとめると，医学部体験授業に参加することで，医師である教員や先輩の実際の姿を見たり，実際の場面に即した体験をしたりすることで医師や医学部へのイメージや意識をよい方向へ変化させることができた。そしてその変化は維持され，一部の参加者は考えを深めてさらにイメージや意識を変化させていることがわかった。その内容は将来像やキャリアプランにも及んでいた。

3.4 将来像やキャリアプラン

3.4.1 将来像やキャリアプランの直後の状態

将来像やキャリアプランについて，「変化があった」と回答したのは5名，「なかった」と回答したのは9名であった（表4）。「変化があった」者の具体的な変化は以下の2つのカテゴリに分けることができた。1つ目は視野の広がりであった。臨床医のみを考えていたが，研究があると知り，新しいキャリアを考えるようになっていた。これは医学科生のみの回答だった。

2つ目は具体化であった。漠然と医師を考えていたが，医師としての具体的な将来像を持ち始めていたり，「人を笑顔にしたい」という考えが，「医療研究を用いて」人を笑顔にしたいといったように手段まで含めた具体的なものに変化したりしていた。このカテゴリは高校生，医学科生両方の回答から成り立っていた。

その一方で，他の項目群と比較して，将来像やキャリアプランは「変化がなかった」という回答の方が多くなっていた。その理由を見てみると，次のように分けることができた。1つ目は参加前の将来像やキャリアプランが全く明確ではなかったというものであった（高校生1名，医学科生2名）。知識不足や流動性が高く，明確な像やプランがなくて刺激を受けても明確にできなかったという回答であった。2つ目は1つ目とは逆に非常に明確だったという回答であった（高校生

表4 将来像やキャリアプランの推移

終了直後	高校生	医学科生	全体
変化があった	2	3	5
変化はなかった	3	6	9
現在	高校生	医学科生	全体
医学部体験授業直後から変化した	2	2	4
医学部体験授業直後と変わらない	3	7	10

2 名，医学科生 2 名）。すでに医師になりたい，臨床医になりたいことを決めており，体験授業を経てもそれが強化はされたものの変化はしなかったという回答であった。

3.4.2 将来像やキャリアプランの現在の状態

現在の将来像やキャリアプランについて，高校生のうち 2 名が「終了直後からさらに変化した」, 3 名が「終了直後と変わらない」と回答した。変化したと回答した 2 名は，医師や医学部へのイメージや意識が終了後に「さらに変化した」と回答した参加者で，その理由や変化の内容もほぼ同じであった。うち 1 名は医学部体験授業だけでなく，その後に読んだ本や家族の存在も変化のきっかけになったと回答した。

医学科生は, 2 名が「終了直後からさらに変化した」, 7 名が「終了直後と変わらない」と回答した。変化の内容について，終了直後はキャリアプランについて何も知らなかったが，今は具体的に考えていると回答した。

将来像やキャリアプランについてまとめると，動機づけやイメージ・意識と比べて，医学部体験授業に参加することによる変化は小さかった。その後の変化を感じた参加者も少なかったが，一部の参加者では終了後もさらに変化が続いていた。変化の内容としては，視野が広がったり, 具体的になったりしていた。また，変化の内容，変化を感じた参加者はイメージ・意識の変化を感じた参加者と重複していた。

3.5 その他

以上の内容に加えて，高校生には，現在の志望進路について尋ねた。5 名のうち 4 名が現在も医学科を志望しており，残り 1 名は他の分野にも興味があるため迷っていた。医学科を志望している 4 名は全員琉球大学の医学部医学科を志望していた。

医学科生には，受験までの期間や医学科入学後に医学部体験授業の内容が役に立ったかを尋ねた。受験までの期間では, 9 名のうち 7 名が役に立った経験があった。その内容としては，体験授業内での実習が高校での実験に役立った，大学のことを先に知ったので不安が低減した，受験時の志望理由書や面接試験時に役立ったといったものがあった。医学科入学後でも 9 名中 7 名が役に立った経験があった。教員や先輩等との人間関係の構築や，実習や実験の手順，操作に役立った，考えるより行動が大事といった姿勢を持つことができたといった声があった。

全員に対して，医学部体験授業を後輩や周囲の人たちに勧めたいかを聞いたところ，14 名中 11 名が「勧めたい」と回答した（高校生 3 名，医学科生 8 名）。残りの 3 名（高校生 2 名，医学科生 1 名）も「どちらかというと勧めたい」と回答した。

4 結果のまとめと考察

4.1 結果の概要

本稿では，医学部体験授業の効果の持続性について検証した。まず，医学部体験授業終了直後は，動機づけが上昇したり，医師や医学部へのイメージや意識が肯定的に変化したりしていた。将来像やキャリアプランについても他の 2 点ほどではないが，変化を感じている者もいた。将来像やキャリアプランに変化があまり起こらなかった理由について参加者の二極化が理由に挙げられる。一方は将来像やキャリアプランが全く明確でなかったため，刺激を受けても変化をしなかった，もう一方はすでに非常に明確だったため，変化をしなかったというものである。将来像やキャリアプランについては個人差が大きく，効果が得にくかった可能性がある。以上の結果は山田ほか（2023）とほぼ同様の結果と言え，体験授業直後を振り返っても当時の自らの変化を認識できていたと言えるだろう。それぞれの効果の持続性については以下にまとめる。

4.2 動機づけの持続性

医学部体験授業参加により動機づけは持続している可能性が示せた。医学部の授業や実習，医学部教員や医学科生の実際の姿，話を通して医学部入学後の状況を知ることができ, 目標が明確になることにつながり，目標に向けた具体的な行動も起こったと考えられる。そしてその効果は一時的なものではなく，長期間，受験までの約 1 年半を経過しても持続している可能性が高い。動機づけが持続的に高まる，または維持されることは，決して容易ではない医学部医学科の入学試験を突破するために必須であると考えられる。

4.3 医師や医学部へのイメージや意識の変化の持続性

医師や医学部へのイメージや意識は肯定的に変化し，特に高校生にて様々な変化があったことが分かった。その肯定的な変化はそのまま持続し，さらに変化が続いた者もいた。具体的には医学部での姿や医師となってからの姿を想像できるようになり，目標が受験という短期的なものから入学後やその後の将来を見据えた長期的なものに変化したと考えられる。このことは, 人生目的意識の向上につながり, 最終的にミスマッチを防いだり，将来的なバーンアウトを防止したりす

ることにもつながるだろう。

4.4 将来像やキャリアプランの変化の持続性

動機づけや医師や医学部へのイメージや意識の変化と比較して，将来像やキャリアプランの変化を感じている参加者は少なかった。しかしながら，変化を感じている者は，視野の広がりや具体化を感じていた。さらにその後も変化を続けていた者もいた。将来像やキャリアプランの変化については，回答が医師や医学部へのイメージや意識の変化の持続性と重複していた。このことから，まずはイメージや意識の変化が起こり，その変化に伴う形で将来像やキャリアプランが変化するという流れが推察される。将来像やキャリアプランの変化を促すために，まずは医師や医学の実態を知ることができるような内容をより多く体験授業に組み込み続けることが有効であると考えられる。それによって全く明確でなかった者にとっては刺激となり，その後自らのキャリアプランを考えるきっかけになる可能性があるし，非常に明確な者にとっては，その像やプランをより適切に，多様に考えるきっかけとなる可能性がある。

4.5 今後の課題と展望

以上のように効果が持続することの利点が挙げられるが，体験授業が詳細にどのような影響を及ぼしたのかまでは，本稿だけでは詳しく明らかにはできないだろう。そのため，さらに詳しい変化の様子を参加者にインタビューすることを計画している。

実施に関しては，現状では体験に参加する生徒数が限られていることが課題として挙げられる。現在実施している内容的に多くの生徒を受け入れることが困難であるため，参加した生徒が体験授業後に広くその体験を生徒や教員に共有する場を設けるよう，高校に働きかける必要がある。

今回の医学部体験授業は 2 日間の実施であったが，「実際のところ」を体感することの効果は一時的ではなく，持続する可能性が示された。そのため，週末等を用いて比較的短期間で実施することができ，実施までのハードルも下げることができたと考えられる。この結果を踏まえ，医学部だけでなく，他の学問分野においても同様の体験授業を実施することにつなげていく。医学部は医学部を志した時点である程度職業は絞られているが，今後は医学部ほど職業が明確でない分野においてどのような効果が得られるのかを検証していくことも必要であると考えている。

参考文献

中央教育審議会（2014）.「新しい時代にふさわしい高大接続の実現にむけた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について―すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために―（答申）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf（2023 年 3 月 1 日）.

藤野文代・林かおり・前田三枝子・深川ゆかり（1999）.「大学生のバーンアウトに関する研究―PIL，Self-Esteem，タイプ A 尺度による分析」『群馬保健学紀要』**20**, 97-102.

Locke, E. A.（1968）. “Toward a theory of task motivation and incentives”, *Organizational behavior and human performance*, **3**, 157-189.

日本の人事部（2018 年 10 月 31 日）.「キャリアプラン」 https://jinjibu.jp/keyword/detl/983/（2023 年 4 月 1 日）.

山田恭子・高山千利・清水千草・田崎優里・浦崎直光（2023）.「医学部志望者を対象とした高大接続事業「医学部体験授業」の実施と成果」『大学入試研究ジャーナル』，**33**, 100-105.

全国医学部長病院長会議（2013）.「平成 25 年度（2013 年度）医師のキャリア形成に関連する医学部教育の実態調査」